
運命と軌跡と共に

エンブレム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命と軌跡と共に

【Nコード】

N8863Y

【作者名】

エンブレム

【あらすじ】

ヴァイロン連合軍とインヴェルズの戦争が終結して数日後。ヴァイロンたちは自身の理想世界を目指して動いていた。しかし、ヴァイロンたちの目指そうとしている理想世界は地上世界の種族たちにとって受け入れられないものだった。ヴァイロンたちはインヴェルズを倒したと言うのに地上世界で未だに起こる戦争に絶望したヴァイロンたちは地上世界を封印すると決めた。そして、人間界の聖志高校の2年生。国崎光聖はルーキーと呼ばれている天才決闘者。そんなある時、彼は偶然に1人の気絶している精霊と出会った。その

精霊。ガスタの巫女ウィンダからヴァイロンから精霊界の地上世界を守って欲しいと言われるのだった。

ブローグ

「馬鹿な！我々、インヴェルズがこんなところで……！ぐああああああああ！」

ヴァイロン連合軍の活躍によって、インヴェルズは次々と滅ぼされていく。

「アルファ、オメガ……。そして死んだ者たちよ……。お前たちの死は絶対に無駄にしない……」

ヴァイロン・アルファとヴァイロン・オメガ、そして多くの連合軍がこの戦いで死んでしまっている。

この戦いが終わったら、世界は平和になるはずだった――

今後のヴァイロンの決断はとても悲惨なことだった――

ヴァイロンは自身の徹底した理想世界を目指す。しかし、地上世界の種族たちにとってはそれは受け入れられないものだった――

「地上世界はインヴェルズが滅んだと言うのに争いが絶えない！」

「このままでは地上世界は腐っていく！」

「我々は地上世界を封印する！」

「ヴァイロンたちが地上世界の封印を決断したと！？いつたいどうして！？」

地上世界の種族たちはこのことに大騒ぎしていた。

「ヴァイロンたちには地上世界の観測は無理だったのかも知れん……。ヴァイロンたちは争いを続けてしまった我々に絶望してしまったのだ。争いを続けてしまった我々にも責任はあると思うがだからと言って、地上世界の封印は認められない！ヴァイロンを倒して我々の世界を守るのだ！」

地上世界の種族たちはヴァイロンとの戦いに備えて再び団結する。

しかし、今だに争いを続ける地上世界に飽きることなく繰り返し返される戦いにヴァイロンたちは絶望し、地上世界の封印と言う判断をしてしまうのだった――

そして、ここに地上世界の種族たちとヴァイロンの戦争が始まる
うとしている！

プロローグ（後書き）

EB「初めまして、エンブレムです。気軽に書ける小説として書く予定の運命と軌跡と共にです。この小説は他のDTストーリーとはまったくの無関係の方針を作ります。もちろん、今話題になっているセイクリッドやヴェルズが登場する予定です。この小説ではインヴェルズを撃退したヴァイロンと地上世界の種族たちが戦おうとしているところから始まります。つまり、DTで言々とエクシーズ起動からスタートです。どんな決闘シーンが来るのか結構見物になってきます。さらに決闘シーンだけではなくバトルシーンもあります。ご期待ください」

第1話 ガスタの巫女ウイ ندا

朝、起きる茶髪の少年がいる。

国崎光聖くにさきこうせいにとって、朝は結構早く起きる。

光聖は制服に着替えるとリビングへと足を進めていく。

「お早う。兄さん」

台所まで来ると茶色の長い髪をした少女がいる。

「ああ。お早う」

彼女の名は国崎聖納くにさきせいな。光聖の妹で歳は同じなため、学年クラスも

同じである。

光聖は聖納と一緒にパンを食べる。

「兄さん。今日は学校で1学期の終業式のデュエル大会ね。私も張り切ってデッキを作ってきたんだから」

「そうだな」

聖納はそう自慢すると自分のデッキを光聖に見せびらかす。

「頑張れよ」

聖納の実力は光聖ほどではなく、一般並の実力である。しかし、決闘に対する思いは強い。

ご飯を食べ終わった2人は家から出て登校する。

2人が通う学校は聖志高校せいしと呼ばれる学校である。

終業式を終えた学校で2人の名前を呼ぶ声がした。

「おい！光聖！聖納さん！」

「何だ川畑か。どうしたんだ？」

川畑と呼ばれた黄色の髪の少年。川畑春次^{かわばたはるじ}がやってくる。

「今日は学校で決闘大会だからよ、期待が出るぜ！そのためのデッキだって調整しているからよ！」

「川畑君。張り切ってるね」

「おうよ！今日はこのために日々デッキ調整を重ねて来たからな！」

川畑も自信満々に決闘大会のためにデッキを組み上げている。自信満々だった。

川畑の言葉に光聖が決闘に勝てないと言う事に駄目だしする。

「お前は何度やっても勝てないだろ？」

「うるせえな！勝ち負けだけが決闘じゃねえよ！」

「それは分かってるから……」

川畑の言葉を適当に流しながら、光聖たちはそれぞれの席へと足を進めていく。

そんな時に校内放送が流れる。

『さて、今日は校内決闘大会です！最後に生き残るのは誰だ！？先生生徒関係せずにレッツバトル！』

「おっしゃー！」

「頑張るぜー！ー！！」

多くの人の声が騒ぎ出す。

「俺たちも別々に行動しようぜ！」

「そうだな」

「ええ」

光聖たち3人もここで別れて対戦相手を探すことにした。

そこにスタスタと学校に入ってくる一人の黒色の髪をした少女がいる。

少女は教室内を警戒しながらゆっくりと入り、ゆっくりと席に付き、机の中にある本を読み出す。

「静ちゃん！」

聖納は静と呼んでいるさっきの少女のところに駆け寄っていった。
「静さん、学校の中でも指折りの美少女で成績優秀。スポーツ万能。

おまけに決闘の腕も相当だぜ。正に学校のアイドルじゃねえかよ……」

川畑の言うとおり彼女。新田^{にっただしず}静は成績優秀でスポーツ万能。決闘の腕も高い。

「どうしたの？聖納さん？」

「決闘大会はお互いに頑張ろうって……」

「ええ」

静は聖納に優しく接する。

そして、決闘大会開催に向けて光聖たちは今動き出した。

校舎裏に来たのは光聖だった。

光聖は対戦相手を探すも結局は見つからずにいる。

「ったく……。面白くねえな……。対戦相手がいなければ決闘も出来ねえ！」

「うう……」

「ん？何だ……？」

光聖は学校の校舎裏で倒れている緑色のポニーテールに杖を持った少女と小さな緑色の鳥がいる。

「この姿、どこかで見たことあるよな……」

「あれ……ここは……？……って人間！？」

少女が目覚めると光聖を見た瞬間にすごく驚く反応をする。

「つまり私の姿が見えるの！？」

「バッチリ見えてるから問題ないだろ。まさかお前の姿はどっかで見たことあると思ったら、ガスタの巫女 ウィンダか！？」

ガスタの巫女 ウィンダ。確かガスタの巫女である少女だったはず。

「うん。そうよ。にしても私たちカードの精霊が見える人間なんて珍しいわ。始めて見た」

ウィンダは光聖の近くまで歩いて光聖を観察し始める。

「何だよ？ジロジロ見るなって！」

「ごめんごめん！」

そして、倒れていた小さな緑色の鳥も目覚めるとウィンダの元へと駆け寄って来る。

「ガスタ・イグル？」

「そうよ。ん？どうしたの？イグル？」

イグルはウィンダの肩に乗ると鳴き声で何かをウィンダに知らせている。

「え！？早くしないとヴァイロンが地上世界を封印してしまうって！？分かってるわよ！」

「ヴァイロンって……」

聞いた話によるとヴァイロンはインヴェルズを封印した神々であるはず。

「お願いがあるの！あなたに私たちの地上世界を救って欲しい！」

「え！？それはつまり……」

「ヴァイロンから精霊界の地上世界を守って欲しいってこと！」

ヴァイロンと地上世界の種族たちが日々争っている。

ウィンダたちの住む世界が再び危機になっている事に光聖は放って置けなかった。

光聖は自分の取り出したデッキを確認し、それをしまふ。

「分かった。でも、ヴァイロンたちはインヴェルズを倒したはずなのにどうして戦争になるんだ!？」

確かにヴァイロンはウィンダたち地上世界の種族の味方となり、倒したはずなのに戦争になっている。それが大きな疑問であった。

ウィンダはその言葉に反応するかのようにゆっくりと地面に座る。

「ヴァイロンは私たち地上世界の精霊が未だに戦争を行ってるの。」

ヴァイロンはその私たちがインヴェルズとの戦争が終わったのに未だに戦争を続けていることにヴァイロンたちは絶望し、私たちの住む地上世界を封印すると言う決断を下したのが始まり」

「つまり、戦争は悪いことかも知れないが、だからと言って世界を封印するのは間違っているって言いたいのかよ？」

光聖はゆっくりと状況を整理しながら、ウィンダに状況を再確認する。

「そうよ。私たちの住む世界がヴァイロンに封印されないためにもあなたの力を貸して欲しかったってわけ」

「そうか。だったら俺も強力するぜ。星の観測者^{スターゲイザー}って呼ばれているそうだけど、結局はやってることが間違ってるさ」

光聖はウィンダのためにも精霊界の地上世界を救うことを選んだ。

「俺は国崎光聖。よろしくな。ウィンダ」

「こちらこそ」

光聖とウィンダはお互いに手を取り合う。

「明日から夏休みに入るから俺の予定とかは気にしないでくれ」

「すごく興味深いわね。詳しく聞かせてもらえない？」

「え!？」

「なっ!？ 静!？ どうしてここに……!？」

静が自分たちの話を聞かれてしまったようだった。

「もしかして、私が見えるの!？」

ウインダも静が自分が見えることに驚いている。

「そうよ」

「何しに来たんだ？もしかしてヴァイロンの手先なのか！？」

光聖は静がヴァイロンの手先だと考えると、ウインダと共に身を構える。

静はため息を付くとゆっくりと喋り出す。

「そんな証拠どこにあるっての？」

「俺たちの話を盗み聞きしたことが証拠に決まってるだろ！」

盗み聞きをしたと考えると光聖は静はヴァイロンの手先だと考え始める。

「そんな誤解しなくていいわよ。私は何も関係無いから安心して」

「そんなわけないよな……。はは……」

光聖はすぐ誤解してしまったようだった。

思わず盗み聞きされたらその人は敵と言っのはありえないこともある。

「その代わり、私も一緒に行くわ」

「え！？」

静の言葉に2人はおどろいた。

「本気なんだな。分かった」

2人は静を受け入れて明日から3人で精霊界へと向かうことにした。

「じゃあ、明日の午前8時にここで待ち合わせましょ」

「そうだな」

「分かったわ！」

3人はここで待ち合わせる約束をここにすることにし、精霊界へ行くことになった。

帰り道、聖納は部活の待ち合わせで遅くなることになったため、一人で帰ることになった。

光聖の学校の決闘大会は自分の行方不明のため、脱落となっている。

静も一緒となると大丈夫かと気にすることもあるけど、学校での彼女の實力も高いため少し安心はする。

ウィンダは光聖に付いていくことになっている。

「星の観測者様のために国崎光聖！お前を倒す！」

「誰だ！？」

2人が振り返ると1人の男がいる。

その男はボサボサの黄色の髪をしたサングラスの少年だった。

「俺の名は松谷星輔。まっただにせいすけヴァイロン様の地上世界封印のためにお前を倒す！」

「いきなりヴァイロンからの刺客！？にしても人間だったなんて！？」

ウィンダは精霊に関係している人間が3人もいることに驚いている。

「そんなことはどうでもいい！決闘だ！」

光聖は決闘盤を起動させて決闘の体制に入る。

「行くぜ！」

「決闘！！」

第1話 ガスタの巫女ウィンダ（後書き）

光聖「なあ、ヴァイロンとの戦いが始まる頃からスタートするの
よ」

EB「言っただろ？どのDTストーリーとは別方向を目指すって」

光聖「それはそうだけどよ。俺のデッキってどんなデッキなんだ？」

EB「さあ？それはお楽しみに。さて、運命と軌跡と共にの第1話を更新！次の2話も完成次第に更新予定。セイクリッドとヴェルズも登場予定なのでこれも期待してください。オリカはさらに決闘を面白くするために登場します。しかし、OCGカードを中心にします。ではスタートです！」

第2話 代行者

光聖と星輔の決闘が始まろうとしていた。

光聖 LP 8000 手札5枚

星輔 LP 8000 手札5枚

「俺の先行でいいか？」

「どうぞご自由に。どっちだっていいしな」

星輔は素直にニコニコしながら光聖に先行を譲る。

「気をつけて！何か企んでいるかもしれないから！」

「分かってるよ！俺のターンだな、ドロー！」

ウィンドのアドバイスをしっかりと受け取ると1枚のカードをドローする。

「天空の使者 ゼラディアスを手札から墓地に送って、天空の聖域を手札に加えて発動するぜ！」

天空の聖域を発動させると3人の近くに天使が住みそうな神殿が建っている。

星輔は変わっていく周りの風景をゆっくりと見回す。

「と言うことは天使族モンスターを中心に？」

「さあな！どのカードが来ても驚くなよ！モンスターをセットしてカードを2枚伏せターンエンド！」

光聖 手札2枚

天空の聖域を発動した時点で自分のデッキはほぼ天使デッキだろうと思っっているだろう。

「俺のターンだぜ」

ドローの言葉を言わずに星輔は1枚のカードをドローして手札を確認する。

「ダーク・グレファアーを召喚！」

ダイ・グレファアーが闇の力を得たモンスターが召喚される。

「闇属性デッキか!？」

「そうさ。手札のゾンビキャリアを墓地に送ってダーク・グレファアーの効果発動!デッキからBF・精鋭のゼピュロスを墓地に送る!」
ゼピュロスは確か、カードを1枚手札に戻すことで自身を特殊召喚できるが、400のダメージを受けるモンスターである。

このターンで星輔はコンボを決めるつもりであろう。

「さらに漆黒のトバリを発動して、ゼピュロスの効果発動!漆黒のトバリを手札に戻して俺は400のダメージを受ける!」

星輔は少しニヤリと笑いながらこう語りだす。

「これで条件は揃った……!」

「え!?!まさかここでエクシーズ召喚!?!」

エクシーズ召喚することはウィングにとっては驚きであった。

「レベル4ダーク・グレファアーとレベル4BF・精鋭のゼピュロスをオーバーレイ!2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!エクシーズ召喚!来い!邪竜クロリアス!」

ダーク・グレファアーとゼピュロスが大きな渦に光の球となって飛び込むとそこから邪竜と呼ばれやすい闇の竜が雄叫びを放ちながら姿を現す。

「いきなりエクシーズ召喚するとはな……!」

「まだクロリアスの力に怯えるなよ?このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、ライフを500払う事でこのターン、このカードは罠カードの効果を受けない。さらにこの効果の発動に対して罠カードの効果を発動することはできない」

「何!?!」

罠カードに滅法強い邪竜が効果を発動させるために自身の周りに

回っている2つの光の球の内、1つを口で食べると周りから邪念のオーラを発生させて罫カードを受けなくさせる。

「クロリアスで裏守備モンスターに攻撃だ！ダーク・クロフェイス！」

クロリアスの口から闇の光線が放たれると光聖の裏守備モンスターを真つ二つにする。

「俺が破壊したのはコーリング・ノヴァだ！このカードが破壊された時、デッキから天空の聖域があれば天空騎士パーシアスを特殊召喚できるぜ！」

光聖の場に白い下は馬。上は聖騎士のモンスターが現れる。

「これはすごいな。いきなりの上級モンスター召喚とは。これでターンエンドをしよう。」

星輔 LP8000 ↓ 7600 ↓ 7100 手札4枚

「俺のターンだ、ドロー！」

パーシアスにとって、邪竜クロリアスの攻撃力ではまったく歯が立たない。

「パーシアスをリリースして、天空勇士ネオパーシアスを特殊召喚する！」

パーシアスがネオパーシアスへと進化していく。パーシアスにあった頃の面影は無く、姿形を変える。

「ネオパーシアスだと！？」

「ネオパーシアスは天空の聖域があれば、俺のライフが上の場合、その数値分だけ攻撃力がアップだ！」

ネオパーシアスの攻撃力がパワーアップし、クロリアスの攻撃力を上回る。

「ネオパーシアスでクロリアスに攻撃！ネオ・パーシアスソード！」

2つの剣がクロリアスを切り裂き、そして爆発する。

「これでターンエンドするぜ！」

光聖 手札2枚

星輔 LP7100↓6200 手札4枚

天空勇士ネオパーシアス ATK2300↓3200↓4100

ネオパーシアスの攻撃力は4100になっている。ライフの差が離れるほど、強くなるモンスターである。

星輔の実力は相当な物でネオパーシアスを簡単に破壊できるのはいつでも出来ると考えていい。

「俺のターンさ、ドロー！」

星輔は光聖のネオパーシアスを見つめた後に手札を確認する。

「俺の邪竜デッキの恐ろしさはこれからだ！魔法カード邪竜の因縁発動！俺の墓地の邪竜と名のついたエクシーズモンスター1体と同じランクの邪竜と名のついたモンスターをエクストラデッキから特殊召喚できる！」

「ッー！」

特殊召喚は封じられてしまう代わりにいきなりエクシーズモンスターを特殊召喚できる魔法カードである。

「来い！邪竜クロスファル！」

胴体が長い漆黒の龍で2つの口を持っている。その2つの口からはとてつもない邪気が漂っている。

「だが、エクシーズモンスターはエクシーズ素材が無ければ力を発揮できない！楽勝だ！」

「残念だが、エクシーズ素材が無いことで力を発揮するモンスターさ！こいつはエクシーズ素材が無ければ、攻撃力は2倍となり、相手モンスターを破壊した時、攻撃力の半分のダメージを与える！そして、守備表示モンスターを攻撃表示に変更できる効果まで持っている！」

「なっ！？」

クロスファルが周りの邪念を吸い取っていくと攻撃力が高くなっ

ていく。

クロスファルは咆哮を放つと、すぐに攻撃態勢に入った。

「クロスファルよ！ネオパーシアスに攻撃！クロス・ヴァイサード！」

攻撃力5000となったクロスファルの攻撃がネオパーシアスを突き破る。

「天空の聖域の効果で天使族が破壊されても俺の戦闘ダメージは0だ！」

「だが、クロスファルの効果で攻撃力の半分のダメージをお前に与える！ファル・ブレスト！」

クロスファルのもう1つの口が開くと闇の力が光聖を追撃し、ダメージを与える。

「ぐはっ！」

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

光聖 LP 8000 ↓ 5950 手札 2枚

星輔 手札 3枚

邪竜クロスファル ATK 2500 ↓ 5000

「光聖！大丈夫？」

「ウインダ。大丈夫だ。まかせとけって」

とは言っても逆に光聖の方がピンチの状態になってしまった。

光聖は自身の可能性を信じて、カードをドロ―する。

「俺のターン、ドロ―！」

クロスファルに対抗するにはそれ以上の攻撃力のモンスターが相手を破壊するカード効果しかなかった。

（いける……！）

「俺は手札から創造の代行者ヴィーナスを召喚！」

長い金髪に白い翼。緑色の服を着ている天使が召喚される。

「代行者だと!?」

「そうさ。俺は代行者を中心とするデツキだ！ヴィーナスの効果はライフを500払って、デツキから神聖なる球体1体を特殊召喚できる！それを3回続けて特殊召喚するぜ！」

光聖のライフは1500減る代わりに3体の神聖なる球体が次々と特殊召喚される。

「レベル2神聖なる球体3体をオーバーレイ！3体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！来い！No.96 ブラック・ミスト！」

エクシーズ召喚したモンスターは天使族モンスター3体をエクシーズ素材に使用したとは思えない漆黒の悪魔だった。

「なっ！？お前は天使族デツキのはず！なのにブラック・ミストだと！？」

「生憎だが種族1つに絞るとか俺はそんなの考えねえ。利用できるものは利用するだけだ」

ブラック・ミストはレベル2が3体揃えやすい代行者ととても相性がいいエクシーズモンスターである。

「ブラック・ミストでクロスファルに攻撃！そしてブラック・ミストの効果は知ってるよな？エクシーズ素材を1つ取り除く事で戦闘時に行う相手モンスターの攻撃力を半分にし、その数値分だけブラック・ミストの攻撃力を上げる！シャドーゲイン！」

「クッ……！」

ブラック・ミストがクロスファルの攻撃力を吸収していく。

「ブラック・ミストの攻撃を続行！ブラック・ミラージュ・ウィツプ！」

ブラック・ミストが手から触手を放つとクロスファルを一撃で倒す。

「続いて創造の代行者ヴィーナスでダイレクト・アタック！」

ヴィーナスもブラック・ミストに続いて星輔に大ダメージを与える。

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ！」

光聖 LP 5 9 5 0 ↓ 5 4 5 0 ↓ 4 9 5 0 ↓ 4 4 5 0 手札 1 枚
 星輔 LP 6 2 0 0 ↓ 6 1 0 0 ↓ 4 5 0 0 手札 3 枚
 No. 96 ブラック・ミスト ATK 1 0 0 ↓ 2 6 0 0 OBU
 3 ↓ 2

ブラック・ミストによって、再び流れは光聖になった。

星輔はブラック・ミストとヴィーナスを見つめるとニヤリと笑う。

「俺のターン、ドロー！」

星輔の場はがら空きになっているが、星輔には何か考えがあるらしい。

「罨カード邪竜の裁きを発動！俺の墓地の邪竜と名のついたエクシーズモンスター1体を除外する事で相手フィールド上に存在するモンスター全て破壊する！クロスファルを除外！」

「カウンター罨神罰を発動！俺の場に天空の聖域がある場合、魔法・罨・効果モンスターの効果を無効にし破壊！」

「くっ！やるじゃねえか！」

神罰で星輔の罨カードは無効化され破壊される。

「だが、手札を1枚捨ててD・D・Rを発動！ゲームから除外されたクロスファルを再び特殊召喚するぜ！」

「ッ！？」

星輔は手札を1枚墓地に送るとゲームから除外されていたクロスファルを再び特殊召喚した。

クロスファルは墓地から特殊召喚することはできないデメリットがあるが、ゲームから除外していれば別となっている。

光聖にとってはクロスファルを再び特殊召喚されることはとても予想外だった。

「そして、手札から捨てた暗黒界の狩人ブラウの効果でカードを1枚ドロ！。続いて手札を1枚捨ててライトニング・ボルテックスを発動！お前の表側表示モンスターは全て破壊！」

「マジか!？」

光聖のブラック・ミストとヴィーナスは突如の雷撃に打たれて粉々になる。

「これで終わりだ。国崎光聖。クロスフェルでダイレクト・アタック!クロス・ヴァイザード!」

「そんな!光聖!」

ウインダが叫ぶもクロスフェルの攻撃は光聖へと向かっている。クロスフェルの攻撃が通ってしまったら、光聖のライフは0になり、決闘に敗北してしまう。

「罨カードガード・ブロック!戦闘ダメージを0にしてカードを1枚ドロー!」

「ちっ……!防いだか。じゃあ、カードを1枚伏せて、ターンエンド!」

(俺の伏せたカードは聖なるバリア・ミラーフォース……。これがあればお前らのモンスターは全滅。一気にクロスフェルで大逆転できるぜ……)

星輔 手札0枚

邪竜 クロスフェル ATK2500↓5000

「俺のターン、ドロー!」

(来た!)

光聖は手札から1体のモンスターを召喚する。

「神秘の代行者 アースを召喚!」

白い顔に白い体。緑色の翼の天使が召喚される。

「アースが召喚に成功した時、俺の場に天空の聖域があれば、デッキからマスター・ヒュペリオンを手札に加える事ができる!そして、アースを除外してマスター・ヒュペリオンを特殊召喚!」

「何!？」

赤い翼に金色の体をした代行者が今ここに召喚される。

マスター・ヒュペリオン。光聖が召喚した上級モンスターである。
「マスター・ヒュペリオンは墓地の光属性・天使族モンスターを除外する事でカード1枚破壊できる！お前のその伏せカード。聖なるバリア・ミラーフォース・だろ？」

「ッ！？」

「その反応どうやらそうらしいな！マスター・ヒュペリオンの効果でパーシアスを除外して、お前のそのリバースカードを破壊！」

マスター・ヒュペリオンの裁きが星輔のリバースカード。聖なるバリア・ミラーフォース・を破壊する。

「やはりミラーフォースだったか」

「だがお前のマスター・ヒュペリオンはもう効果を使っている！俺のクロスフェルは倒せない！」

「忘れてねえか？マスター・ヒュペリオンは天空の聖域があれば1ターンに2度、この効果を発動できる！」

「何！？」

光聖は墓地にあつたネオパーシアスを除外するとマスター・ヒュペリオンが星輔のクロスフェルを破壊する。

「手札からトライワイトゾーン発動！俺の墓地のレベル2以下の通常モンスターを3体特殊召喚する！神聖なる球体3体を墓地から特殊召喚！」

3体同時に神聖なる球体がフィールド上に特殊召喚される。

「レベル2神聖なる球体2体をオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！エクシーズ召喚！来い！ダイガスタ・フェニクス！」

咆哮を放ちながら青くメラメラと燃えた鳥が光聖のフィールド上で空を飛ぶ。

「ダイガスタ・フェニクス……！」

ウインダはダイガスタ・フェニクスを見るとガスタの力を感じている。

ダイガスタ・フェニクスはガスタのモンスターであり、精霊界で

は最近になって仲間になったモンスターである。

「ダイガスタ・フェニクスの効果はエクシース素材を1つ取り除く事で風属性モンスター1体は2回攻撃できる！」

「何！？」

ダイガスタ・フェニクスは2回攻撃が可能となり、すでに星輔のライフは0にできる。

「ダイガスタ・フェニクスで2回ダイレクト・アタック！フェニクス・フレイム！」

「ぐあ！？」

ダイガスタ・フェニクスの炎が星輔を包み込む。

続いて、マスター・ヒュペリオンが攻撃態勢に入り、星輔に襲い掛かってきた。

「マスター・ヒュペリオンで星輔にダイレクト・アタック！マスター・ジャッジ！」

マスター・ヒュペリオンの裁きが星輔に見事直撃し、ダメージを与えて彼のライフを0にする。

星輔 LP 4500 ↓ 3000 ↓ 1500 ↓ 0

「すごい……！」

「流石はルーキーと呼ばれているだけあるな……！」

光聖はルーキーと呼ばれるほどの天才デュエリストである。その実力は健在で一瞬で星輔のライフを0にしてしまった。

ウインダは光聖の勝利を確認するとすぐに駆け寄ってくる。

「これほどの実力があるなんて……！もしかしたらヴァイロンを倒せるかもしれない……！」

「くそ……！お前、強いな。完敗だ。ヴァイロンってやはり間違っているのか？」

星輔はヴァイロンのやろつとしている行いが間違っているのか光聖に問う。

「そうだな。地上世界の種族達のために戦っているかと思ったら、結局これかよってことだ。そんなのは気に気に入らねえよ。それに人間界まで影響が出るかも知れねえしな」

「俺が間違っていたんだな……。すまなかった。けど次戦うときは負けないぜ！」

「ああ。いつでも相手してやるぜ！」

2人はお互いに握手をかわして別れを告げる。

地上世界の種族VSヴァイロン。この戦争が今、精霊界で始まるうとしていた。

第2話 代行者（後書き）

EB「いきなりだけどオリカ登場させました！」

ウィンダ「なかなかバリエーションがあるんじゃない？」

EB「まあな！今回は小説は短め。皆さんすみません」

ウィンダ「まあ、長さは関係ないじゃない？」

EB「それもそうだな。そして、さらにさらに！とっても早いですが、新キャラ募集と新オリカの募集を行います！詳しくは活動報告をご覧ください」

ウィンダ「例えば光聖と戦う対戦相手や仲間になるキャラとか？」

EB「運がよければ小説のレギュラーになれるかも？ぜひ応募ください！」

カード紹介

邪竜クロリアス 闇ノドラゴン / 4 / 2300 / 100

【エクシーズ】闇属性レベル4モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて、ライフを500払う事で発動できる。このターン、このカードは畏カードの効果を受けない。この効果の発動に対して、畏カードの効果が発動する事はできない。

邪竜クロスファル 闇ノドラゴン / 4 / 2500 / 0

【エクシーズ】闇属性レベル4モンスター×2

このカードは墓地から特殊召喚する事はできない。

1ターンに1度、このカードが攻撃する時、自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する事でこのカードのエク

シーズ素材を1つ取り除く事ができる。このカードのエクシーズ素材が無い場合、このカードは以下の効果を得る。

- このカードの攻撃力は2倍になる。
 - このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。
 - このカードが攻撃する時、攻撃対象となるモンスターの表示形式を変更する事ができる。この時、リバーズ効果モンスターの効果は発動しない。
- 「邪竜クロスファル」は自分フィールド上に1体でしか表側表示で存在できない。

邪竜の因縁 通常魔法

自分の墓地に存在する「邪竜」と名のついたエクシーズモンスター1体をゲームから除外する。選択したモンスターと同ランクの「邪竜」と名のついたエクシーズモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。このカードを発動したターン、自分はこのカード以外の効果でモンスターを特殊召喚することができない。

邪竜の裁き 通常罫

自分の墓地に存在する「邪竜」と名のついたエクシーズモンスター1体をゲームから除外した場合のみ発動することができる。相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8863y/>

運命と軌跡と共に

2011年12月17日03時51分発行